

森 まゆか 4年 演奏学科 鍵盤楽器（ピアノ）

研修先 モーツァルテウム夏期国際音楽セミナー（オーストリア・ザルツブルク）

1. 研修概要

(1) 研修機関

INTERNATIONALE SOMMERAKADEMIE UNIVERSITÄT MOZARTEUM SALZBURG

(2) 研修日程

2007年8月1日～2007年8月11日

(3) 担当教授

Prof.Sergei Dorensky（セルゲイ・ドレンスキー）

モーツァルテウム音楽院夏期国際音楽アカデミーは、毎夏モーツァルトの生地ザルツブルクで開催される「ザルツブルク音楽祭」の一環として、国際モーツァルト財団とモーツァルテウム音楽院が世界の若い音楽家の育成を目的として開講しているもので、1916年の創設以来今年で91年目を迎える。今年は7月16日から8月25日までの間、前期・中期・後期の各2週間、全6週間に渡って開講され、私は中期に参加した。

2. 研修の動機

“学生の間にはぜひ海外の講習会を受けに行きたい” 私がそう思うようになったきっかけは、5年前のウィーン研修旅行にあった。国立オペラ座でのオペラ鑑賞のほか、音楽院でレッスンを受講したり仲間達と自主企画コンサートを開いたりなど、そこで様々な経験をする事ができた。しかしそれ以前に私にとっては、至る所に装飾を凝らした多くの高い建物、先人達の足音が聞こえてくるかのような石畳の道・・・日本とは別世界のような街並みの全てが新鮮であった。空気の流れすら違って感じたヨーロッパの土地。そこでの暮らしの中で感性を養ってきた人々の中に溢れている音楽とは、一体どのようなものなのか？世界各地から音楽に志す学生達が一堂に会する講習会という場で、多くの音楽に触れ、自身の演奏を見つめ直す機会としたい。そう思い、この90年以上の歴史を誇るザルツブルク夏期国際音楽アカデミーへの参加を決意した。

3. 研修内容

<オーディション>

研修初日は受講生を決めるためのオーディションが行われた。開始時刻の10分程前に行くと、オーディションの行われるレッスン室の前には既に多くの学生達が集まっており、ざっと見渡した限りでは20人以上がいた。みな口数少なく、この緊張感ただよふ空気の中にひとたび入ってしまった私は、にわかに不安が押し寄せてくるのを感じた。まもなくしてそこに現れたドレンスキー先生は、威厳に満ちていながらも、私を含め数人に挨拶代わりの握手をして下さったり、冗談をおっしゃったりと、想像とは裏腹にお人柄はとても穏和な印象を受けた。オーディションは、まず出身国、現在勉強している場所、年齢についてなど幾つかの質問を受けた後、事前に提出した受講希望曲リストの中から1曲を演奏するというものであり、私はスクリャービンのソナタ5番を弾き無事に合格することができ

た。受講生には、普段からモスクワ音楽院のドレンスキー先生のクラスで学んでいるロシア人の学生が多く、その他には日本人、韓国人、アメリカ人、ドイツ人がいた。私以外の日本人3人は、既に海外生活の長い、モスクワやパリに留学中の人達であった。

<受講曲>

- ・ Scriabin : Sonata No.5 op.53
- ・ Chopin : Etudes op.10-5 op.25-5 op.25-12
- ・ Beethoven : Sonata No.31 op.110
- ・ Rachmaninoff : Sonata No.2 op.36

<レッスン>

オーディションの翌日からレッスンがスタートした。一人当たり4回のレッスンを受けることができた他、ドレンスキー先生のアシスタントでいらっしゃるミシェル・アン先生からも、希望を出して45分×3回のレッスンを入れて頂くことが可能になった。そのため私のレッスン回数は計7回となり、1日に2回のレッスンが入ることもしばしばだった。

アシスタントのアン先生は、どの受講曲に対しても細部に渡り丁寧に指導して下さり、今の私に欠けている部分について適格なアドバイスを頂くことができた。レッスン後は毎回練習室へと戻り、教わった数々の事を自分の中で整理した上で、その受講曲を再び持ってドレンスキー先生の所へと向かった。

さて、待ちに待ったドレンスキー先生のレッスン。私は毎回その日の最後になったが、先生は生徒にお疲れの様子を全く感じさせず、終始変わらない熱意でもって教えて下さった。穏やかな雰囲気の中であってもレッスン中に交わす先生の視線だけは、私の演奏の全てを見透かしているかのようでその都度緊張が走るものであった。

スクリャービンのソナタでは、音の作り方やスクリャービン独自のリズムの扱い方について伝授して頂く事ができたのだが、それは譜面上には表せないであろう微妙なニュアンスを含むため、私自身楽譜から読み取る事も想像する事もできなかった音楽であった。しかし、そのすべてに「ああ、これがスクリャービンの世界だったのかあ！」とため息をつくばかりであった。また、先生はソナタ5番と共通の要素が使われているとして、ソナタ4番の第1楽章についてもレッスンして下さいました。響きの作り方に私自身意識を傾けたつもりであったのだが、そうではないと仰って弾いて下さった先生の音は、同じピアノでも別の表情を帯びて聴こえ、例えどんなに小さなエネルギーであっても全ての音が上へ上へと放たれているかのようであった。

先生が隣で弾いて下さるベートーヴェンやラフマニノフの曲は、私自身が弾いていた音楽とはまるで違うものだった。旋律がただ歌となって奏でられるのではなく、それらが言葉となってこちらへ向かって語りかけてくるかのように感じられた。そこには感情と共に自然な呼吸や息遣い、そしてイントネーションが含まれていて、それらが矛盾することなく相互に噛み合った上で、ある一つの必然性を生み出しているかのように感じられるのだった。しかし、自分なりにそれを再現しようとしてみると現実には難しいもので、改めて演奏とは心に感じるものやイメージを思い描くだけでなく、知識力や技量がそれに追いついていなければ表現する事は難しいものだという事を痛感した。

レッスンは主に英語で行われていたのだが、先生は時折ロシア語で曲の背景やロシアの

ピアニストに関して様々な話をして下さいました。そのような時は、聴講していたモスクワへ留学中の日本人の方が横で助けて下さったおかげもあり、大変有意義なレッスンを受けることができた。

<レッスン聴講>

研修中レッスンや練習以外の空き時間を見つけては、ピアノやヴァイオリンなどのレッスンを聴講しに行った。その中でも特に頻繁に私が訪れたクラスは、ドレンスキー先生、そして同じくピアノのロバート・レヴィン先生のレッスンであった。

モスクワ音楽院に通うロシア人の学生達が集うドレンスキー先生クラスのレッスンは、その生徒達の演奏を聴くだけでも毎回圧倒させられた。聞けば彼らのほとんどは今年二十歳ということだったが、古典派のソナタ2曲にエチュード数曲、そしてロマン派や近代の大曲を次々と弾きこなしたかと思えば、更にはお互いに伴奏し合いながらコンチェルトを弾いてしまうのであった。彼らの演奏は確固としたテクニックを土台に、それぞれが独自の演奏スタイルと作品への解釈を持ち、その意思を聴くものに明確に伝えていくのである。彼らの演奏を聴く度に私の中には衝撃の嵐が沸き起こったのと同時に、では今、そして今後の自分にとって目指すことのできる演奏のあり方とはどのようなものなのだろうかと考えをめぐらす大きなきっかけともなっていた。

レヴィン先生のクラスのレッスンでは、古典派の作品を中心に持って来ている受講生が多かったが、先生はそれらの曲をあらゆる角度からご指導されていた。ある時は指の構造から考えて演奏しにくいパッセージを幾つか取り出し、物理的に道理にかなった練習法について紹介され、それらは多くの曲に応用できるようなものであった。またある時には、曲のキャラクターと和声の移り変わりを関連づけ分析的に見ていきつつ、それぞれのフレーズの持つ感情を、顔の表情や声色の変化、身振り手振りを使い役者級の演技力でもって指導される。そして時として、曲の中に隠された意味までもがそこに姿を現した時、受講生を始め、聴講生一同賛同し、感激し合うのであった。このクラスでの聴講は毎回が大変楽しいもので、これまで以上に、より広い視野と考え方で作品に向き合えるための多くの手がかりを吸収できたように思う。

<研修中の生活>

2週間のザルツブルク滞在中は、学生寮 FRANZ-VON-SALES-KOLLEG から毎朝バスで20分程かけて、レッスンが行われる NEW MOZARTEUM へと通った。ドレンスキー先生のクラスは他のクラスよりも2日遅れで開講されたため、ザルツブルクでの1日目は市内をゆっくり観光することができた。この日は朝から大雨だったが、午後になると瞬く間に青空が広がり晴れ渡った。そうした天気の下で目にしたザルツブルクの町は、写真で幾度となく眺めた事のあった風景の何倍にも美しいものに感じられ、憧れの地へ来れた喜びを胸に、新市街と旧市街の両方を散策して回った。

研修が始まると、受講生は毎日同じ時間に同じ練習室を借りることができた。今年から新校舎としてできた NEW MOZARTEUM 内の練習室は、普段弾いているものからは考えられないほど調律された良いピアノが入っており、3階の私が使う練習室の大きな窓からは、隣にある有名なミラベル庭園が見渡せるのであった。毎朝早く行くと、聞こえてくるのは庭園の噴水の音と遠くの教会から響いてくる鐘の音だけである静けさの中、朝の澄んだ空

気がとても気持ちよかった。

研修もあとわずかかという時期になってくると、現地で仲良くなった受講生達とお互いに誘い合い一緒に夕食へ出掛ける事も多くなった。そこでは海外の様々な音楽院や講習会、そして音楽家たちの話題が絶えず飛び交い、私は話についていくだけで大変であったが、たくさんの情報をもたらしてくれると共に、彼らの多様な価値観に触れる事で多くの刺激を受けたように思う。

期間中に開催されていたザルツブルク音楽祭では、この地ならではの音楽会や憧れのピアニストの演奏会などを思う存分満喫することができ、普段の学生生活ではなかなか学外の演奏会を聴きに行く機会が少ない私にとっては、まさに夢のような特別なひとときを感じられた。

<研修を終えて>

サマーアカデミーでの2週間は本当にあつという間に過ぎていったが、この短期間で体験できた数々の事は私にとってきっと一生の財産にもなっていくことだろう。海外の様々な国で勉強している同世代の学生達の演奏を初めて目の当たりにし、自分の未熟さを思い知らされたのと同時に、今こうして音楽の勉強ができる環境にいることを本当に幸せなことだと再認識した。何故これほど多くの人々が音楽に一生を捧げるのか？私は今回の研修を通し、音楽とは、探求して行けば行くほど、また素晴らしい演奏に出会えば会うほど、奥深さや無限の可能性を秘めていて未知の世界が新たに広がっていくものだと感じた。だからこそ、そこに一生をかける価値があるのではないかと。ザルツブルクで得てきた多くのものを今後自分を磨き成長していく上での糧とし、この果てしない道のりを一步一步着実に前進していきたいと思う。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて下さった学生生活委員会の先生方や学生課の皆様、支えてくれた家族や友人、そしていつも私をご指導下さる渋谷淑子先生に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



レッスン終了後、ドレンスキー先生と